

昭和五十年

日本思想史関係研究文献要目

凡 例

- 一、本要目には、昭和五十年に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本並びに雑誌・紀要論文を収録した。
- 一、本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのを適宜収めた。
- 一、右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。
 - ⅠⅡ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道德教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他の項目順に分類配列した。
- 単行本は、書名・著者名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。
- 一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史学研究室所属の助手・大学院学生があった。
- 一、日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に作成したためもあって、文献の選択や配列に不備な点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

I 単行本目録

総 雑

古 代

日本思想史要説	古川 哲史編	文化書房博文社	神話と神話学	大林 太良	大和書房
日本文化史論考	大森 志郎	創文社	日本神話の構造	伊藤 清司編	弘文堂
日本文化史学への提言	和歌森 太郎編	弘文堂	続神話の体系	上山 春平	中央公論社
日本の文化	宮西 一積	高文堂出版	日本古代仏教の展開	井上 光貞	吉川弘文館
日本文化への一視角	生松 敬三	未來社	古代寺院の成立と展開	鶴岡 静夫	〃
東洋文化と日本	三枝 充	未來社	飛鳥・白鳳仏教論	田村 円澄	雄山閣
日本人の発想	今井 淳編	ぺりかん社	新羅と飛鳥・白鳳の仏教文化	田村 円澄編	吉川弘文館
日本的思考の原型 —民族学の視角—	神島 二郎	講談社	日本靈異記とその社会	志田 淳一	雄山閣
道の思想史 上・下	高取 正男	〃	比叡山と天台仏教の研究	村山 修一	名著出版
「うき世」の思想	山田 宗睦	〃	平安貴族社会と仏教	速水 侑	吉川弘文館
日本文学史序説 上	橋本 峰雄	〃	覚鏝の研究	榎田 良洪	〃
日本教育文化史	加藤 周一	筑摩書房	万葉の精神構造	松原 博一	桜楓社
山岳宗教の成立と展開	結城 陸郎編	明玄書房	古代日本人の時間意識 —その構造と展開—	田中 元	吉川弘文館
ミロク信仰の研究 新訂版	和歌森 太郎編	名著出版	古代の出雲と大和	水野 祐	大和書房
地藏信仰	宮田 登	未來社			
日本浄土教文化の研究	速水 侑	塙書房			
女人往生思想の系譜	伊藤 真敬	隆文館			
道教と日本人	笠原 一男	吉川弘文館			
日本政治思想史概論	下出 積与	講談社			
	松本 三之介	勁草書房			
			日本中世の国家と宗教	黒田 俊雄	岩波書店
			中世民衆の生活文化	横井 清	東京大学出版会
			現代人の宗教一、親鸞と日蓮	丸山 照雄編	河出書房
			二、源信・法然・道元	〃	〃

法然上人研究

法然上人研究会編 隆文館

親鸞思想 — その史料批判

古田武彦 富山房

一遍と時衆教団

金井清光 角川書店

時宗と中世文学

〃 東京美術

日蓮

田村芳朗 日本放送出版協会

日蓮宗布教の研究

影山堯雄 平楽寺書店

日蓮各派の教学

有賀要延 山喜房仏書林

日蓮宗の諸問題

中尾堯編 雄山閣出版

禅師道元の思想

柴田道賢 公論社

蓮如

菊村紀彦 雄山閣出版

無常の文学

西田正好 塙書房

中世文学と仏教の交渉

石田瑞磨 春秋社

法語文学の世界

小林智昭 笠間書院

南北朝の虚像と実像 — 太平記の歴史学的考察 —

岡部周三 雄山閣出版

近世

日本思想史講座・五・近世・二

古川哲史編 雄山閣出版

新井白石の時代と世界

宮崎道生 吉川弘文館

仁斎・徂徠・宣長

吉川幸次郎 岩波書店

徂徠学派 — 儒学から文学へ

日野竜夫 筑摩書房

変革期における国学

芳賀登 三一書房

長崎のオランダ医たち
舎密開宗研究

中西啓 岩波書店
坂口正男等著 講談社

近世以降武家家訓の研究

近藤 齋 風間書房

クリンタン研究・二・論攷編

松田毅一 〃

妙好人とかくれ念仏

小栗純子 講談社

近世文芸思潮攷

中村幸彦 岩波書店

上田秋成

岩崎小弥太 有精堂出版

橘守部と日本文学 — 新資料とその美論

徳田進 芦書房

变化論 — 歌舞伎の精神史 —

服部幸雄 平凡社

幕末政治思想の史的展開

鶴沢義行 三和書房

水戸学の研究

名越時正 神道史学会

象山と松陰 — 開国と攘夷の論理

信夫清三郎 河出書房新社

二宮尊徳

守田志郎 朝日出版社

坂本龍馬

飛鳥井雅道 平凡社

近代

明治経済思想史

堀経夫 明治文献

『青鞜』の女たち — 比較文学への試み —

井手文子 海燕書房

医学思想史三 — 日本における近代医学の成立 —

宮本忍 勁草書房

現代日本社会学史序説 — マルクス主義と近代主義 —

庄可興吉 法政大学出版局

柳田国男の学問形成

明治思想家の宗教観

近代仏教教育史

明治仏教の思潮

―井上円了の事蹟―

妹尾義郎と「新興仏教青年同盟」

日本プロテスタント教会の成立と展開

日本の告白教会の形成

内村鑑三とその時代

―志賀重昂との比較―

大西祝と内村鑑三

日本フアンズム下の宗教

矢内原忠雄

北一輝研究

大正デモクラシー研究

三〇年代の思想家たち

虚無思想研究 上

転向の思想的的研究

後藤 総一郎編 白 鯨 社

比較思想研究会編 大蔵出版

齊藤 昭俊 国書刊行会

宮本 正尊 俊成出版社

松根 鷹 三一書房

土肥 昭夫 日本基督教団出版局

雨宮 栄一 新教出版社

鈴木 範久 日本基督教団出版局

陶山 努 笠間書院

市川 白弦 エヌエス出版社

西村 秀夫 日本基督教団出版局

宮本 盛太郎 有斐閣

太田 雅夫 新泉社

久野 収 岩波書店

大沢 正道 岩波書店

藤田 省三 岩波書店

II 雑誌・紀要論文目録

総 雑

日本文化の原型と変容

日本人の精神生活

―外庄への反応―

空と日本文化

―仏道から芸道へ―

和魂洋才・和魂漢才・やまとだまし

―上・下―

日本文化に与えたキリシタンの衝撃

―つづぎ―

日本人の自我意識 素描

―日本史学史における中世観の展開―

歴史意識と歴史の視点

―思想史の方法手続きについて―

―田原嗣郎氏の「読書ノート」を念頭に―

和辻倫理学の研究視角について

陰陽五行思想の日本的受容の一考察

宿曜道と宿曜勘文

算家の世界

―芸と学のあいだ―

長尾 龍一

時野 谷 滋

木村 雄 吉

今井 泰 子

関本 栄 一

野崎 守 英

永原 慶 二

守本 順 一郎

山田 洸

松島 隆 裕

桃 裕 行

中山 茂

思想 六〇七

社会科学紀要 二四

大倉山論集一二

比較文学研究 二七

文学 四三七・九

外国文学 二三

実存主義 七二

思想 六一五

季刊科学と思想 一七

倫理学年報二四

日本思想史学七

立正史学 三九

思想 六〇七

日本人の神観

関根 文之助

高千穂論叢
五〇—一

日本における仏陀観

由木 義文

哲学(三田哲学
会) 六三

宿神論

服部 幸雄

文学
四三—一・二

伊勢神宮をめぐる忌と祓

岡田 重精

皇学館大学紀要
一三

神宮山口祭について

森脇 宗彦

神道史研究
二三—四

民間信仰と神仏習合
—修験道をめぐって—

花見 恭

思想 六〇七

前近代における国家と天皇

門脇 禎二

日本史研究
一五〇・一五一

守本順一郎著「日本思想史
の課題と方法」

田原 嗣郎

季刊科学と思想
一六

古 代

日本神話と日本人の精神生活

藤井 信男

大倉山論集一二

聖徳太子十七条憲法と神話
・伝説・歴史

夜久 正雄

亜細亜大学教養
部紀要 一二

「天」の思想と表現
—万葉の景物—

戸谷 高明

早稲田大学教育
学部学術研究国
語国文学編二四

万葉集にあらはれたる永遠
の思想

四宮 正貴

神道学 八四

—古代日本人の天皇観・
国家観・人間観について—

松本 雅明

法文論叢 三六

宣命の発展と衰退
—日本における散文の成
立と大陸思想—下—

多田 一臣

国語と国文学
五三—一

「靈異記」と景戒
—自土意識をめぐって—

伊藤 慎吾

滋賀大國文二二

源氏物語に見えた平安時代
の文化について

多賀 宗隼

日本歴史三三八

—政治と文学—

河音 能平

前衛 三八八

「今昔物語集」の民衆像
(日本の思想—七—)

推古朝の「国記」について

榎 英一

日本史論叢 五

古事記に依拠した『旧記』
の発見

西宮 一民

皇学館大学紀要
一三

—「新撰龜相記」・「年中
行事秘抄」の研究から—

—「日本紀の成立について
—一・二・三—

小野田 光雄

学苑四二一・四
二二・四二五

平安朝積奠に於ける「七経
輪転」の一考察

台蔵 明

皇学館論叢
八—四

平安時代の菅家と江家

所 功

皇学館大学紀要
一三

日本仏教教育源流考

藤 謙敬

新潟大学教育学
部紀要 一六

繼文時代の若干の宗教的観念について

Zelly Nauman
渡辺健 訳

民族学研究
三九—四

甕棺の他界観の系統性

大間 茂

古代文化
二七—六

天神地祇論考

平野 孝 国

神道学
八六

〃 — 続 —

〃

〃
八七

崇神紀にみられる神祇思想

日野 昭

龍谷大学仏教文化研究所紀要
一四

万葉におけるカミ(神)意識の性格

松原 博 一

日本大学芸術学部学術研究四

国生み神話

広畑 輔 雄

日本中国学会報
二七

日本靈異記と神祇信仰

志田 諄 一

茨城キリスト教大学紀要
八

『靈異記』に見える庶民の宗教意識

新保 哲

論究(中大)
七一—

「神祇官年中行事」について

久保田 収

皇学館論叢
八一—

初期に於ける神宮寺序説

日山 俊 介

湘南史学
二

古代豪族と仏教

二葉 憲 香

龍谷大学仏教文化研究所紀要
一四

氏寺考

嶋田 暁

紀要(愛泉女子短大)
一〇

再び聖徳太子の仏教について

望月 一 憲

印度学仏教学研究
二四—一

聖徳太子「勝鬘經義疏」における善の思想をめぐって

梶村 昇

亜細亜大学教養部紀要
一一

— 承前 —

大仏蓮弁毛彫の思想史的背景
— 華嚴經と梵網經の相異について —

平岡 定 海

大手前女子大学論集
九

行基論ノート

田中 通 夫

日本史論叢
五

行基の宗教的主体と実践

二葉 憲 香

龍谷史壇
七〇

行基と平城京造営

田村 円 澄

史淵
一一二

奈良時代の密教の一考察

吉田 靖 雄

続日本紀研究
一七九

平安仏教論

速水 侑

日本歴史
三二五

最澄の菩薩思想

八重樫 直比古

日本思想史研究
七

最澄に関する一考察

熊田 健 二

倫理学研究
二二

— 天台五宗と戒壇独立をめぐって —

竹田 暢 典

大正大学研究紀要文学部・仏教学部
六一

伝教大師における理想的人格

竹田 暢 典

伝教大師における菩薩教団の構想

木内 央

〃

伝教大師における菩薩教団の構想

仲尾 俊 博

密教学
一二

「照千一隅」説の矛盾と誤謬

野口 恒 樹

皇学館論叢
八一—

やはり「一隅を照らす」が正しい

〃

神道史研究
二二—一

「照于一隅」問題についての結論

福井 康 順

天台学報
一七

草木成仏思想の概観

三崎 義 泉

〃

空海と最澄の訣別について 性霊集を通じて見たる空海 の自然観と自然描写	和田 悌一	精神科学 一四 金城学院大学論 集 六一
徳一の「中辺義鏡」撰述意図 ―最澄の「一乗義集」へ の反論か―	野口 進	集
往生要集に於ける十念の思想	浅田 正博	仏教学研究三一
ゆがめられた覚鑿伝について	渡部 治	倫理学研究二二
中尊寺における顕密宗旨の 再検討	榎田 良洪	大正大学研究紀 要文学部・仏教 学部 六一
《三宝絵》の編纂意識	佐々木 邦麿	大正大学研究紀 要文学部・仏教 学部 六〇
禁忌習俗の研究 ―王朝公卿日記を資料と して―	出雲路 修	文学 四三―三 日本民族学 一〇二
反農耕の思想 ―源氏物語試論―	西岡 陽子	文学 四三―一二
記紀神話体系私考― ―神の降臨を中心として	今西 祐一郎	文学 四三―一二
続『古事記』神系譜考	坂東 文雄	四国女子大学・ 四国女子短期大 学研究紀要一七
天孫降臨説話について	永井 不二夫	古代文化 二七―三
皇祖神アマテラスの成立	広畑 輔雄	民族学研究 四〇―三

天照太神の起源(上)	角林 文雄	続日本紀研究 一八〇
大嘗祭に見る古代天皇権力 の演技構造 ―演劇と政治の接点につ いての一考察―	工藤 隆	演劇学 一六
大嘗祭の祭神をめぐる問題 祈年祭と新嘗祭の班幣をめ ぐる問題	真弓 常忠	皇学館論叢 八一六
古事記禊祓条にみえる化成 神について ―冠位制と日本神話の一 場面―	菅野 雅雄	神道史研究 二二三―三
聖徳太子の仏教と政治 推古朝における仏教統制 ―僧正僧都制の再検討―	高橋 事久	名城法学 二四―二・三
「崇仏論争」の再検討	梅林 久高	龍谷史壇 七〇
桓武朝の宗教的側面	野田 嶺志	人文研究 三
桓武朝延暦年間の仏教政策 について	朝枝 善照	龍谷大学仏教文 化研究所紀要 一四
中世	中村 元	龍谷史壇 七〇
中世的思惟の意義(中世的 思惟の特徴―一九完―)	鎌田 純一	大倉山論集一二
中世に於ける精神生活 ―源頼朝の場合を中心と して	中村 元	心 二八―二

花園天皇宸記と徒然草 — 発想の継承、時代思潮、 当代語をめぐって	白石大二	早稲田大学教育 学部学術研究 国語・国文学編 二四
徒然草に於ける中国思想の 受容	山田栄子	国文学論考二一
北山文化人の一試論 — 朝山梵灯(師綱)を例 として(九州大学) 創立五〇周年記念論文 集)	川添昭二	史淵 一二二
夢想の意味あい — 「看聞日記」の場合	佐藤邦生	国文学攷 六八
北条氏執権体制下に於ける 関東天文・陰陽道(一) — 「義時政権」より「泰 時政権」へ—	金沢正大	政治経済史学 一一一
室町時代初期における儒教 的教養の展開	板野哲	新居浜工業高専 紀要(人文 科学編) 一一
室町時代後期の学僧彭叔守 仙伝に就ての新説	玉山竹二	日本歴史三二八
中世末期における北陸地方 の学芸 — 特に一乗谷の朝倉氏を 中心に	平泉 洸	金沢工業大学研 究紀要 B一
『神皇正統記』における末 世観 — 北畠親房の歴史意識—	我妻建治	紀要(成城大)六
太平記の歴史叙述 — 軍記の表現構造をさぐ るための試み	桜井好朗	文学 四二—五
北条重時家訓試考 中世武家家訓にあらわれた る倫理思想(一) — 北条重時家訓の研究— 戦国武将の思想と上杉定正 状(含翻刻)	石井利雄 石井清文 石井清彦	日本歴史三二二 政治経済史学 一〇八
軍忠状と軍忠概念	佐藤和夫	軍事史学 一一—二
中世における仏教教育—二— 法然の場合(大正大学創立 五〇周年記念論文集)	斎藤昭俊	大正大学研究紀 要文学部仏教学 部 六一
親鸞聖人の教育思想	藤謙敬	新潟大学教育学 部長岡分校研究 紀要 二一
親鸞の教化的姿勢(「甲南 女子大学」創立一〇周年記 念号)	吉川正二	甲南女子大学研 究紀要 一一・一二
隠者の教育思想 — 兼好を中心として	竹内明	教育学研究 四二—一
定家の有心体とその背後 「有心」理念の形成	岩崎礼太郎	国文学攷 六八
中世歌論における「おもか げ」について	池上康夫	日本文芸研究 二七—三
文芸理論における花実論 — 心詞論と虚実論との関 係において—	武田元治 実方清	群馬大学教育学 部紀要人文・社 会科学編 二四 日本文芸研究 二七—二

正徹の道の論	石津純道	学苑 四二一	平家物語考 —故事引用にみられる神 的支配の意識	小宮美枝子	実践国文学 八
宗祇の道の論	菅原真静	〃 四三三	浄土教思想と日本人の精神 生活	森章司	大倉山論集一二
徒然草における「わび」の 理念	黒田正男	日本文学 二四—八	—善導と法然の対比を中 心にして(「日本人の 精神生活」へ特輯) —(一—)	阿川文正	大正大学研究紀 要文学部仏教学 部 六一
洞山・曹山の五位思想と世 阿弥の能楽論	黒田正男	宮城教育大学紀 要 九	法然浄土教成立過程の一考 察(大正大学創立五〇年記 念論文集)	服部正穩	同朋大学論叢 三三
—「遊楽芸風五位」の特 色とその成立の時期	石黒吉次郎	専修国文 一八	法然上人の浄土思想	坪井俊映	仏教文化研究 二二
世阿弥能楽論 —「風姿花伝」以後の世界	片岡智子	ノートルダム清 心女子大学国文 学科紀要 八	法然教学の基礎的研究 —語録述作の年次・事情 について	笠原一男	東京大学教育学 部人文科学科紀 要 六一
世阿弥能論における「和合」 の世界	新川哲雄	日本思想史学七	鎌倉仏教と女人往生思想 —法然の場合	浅井成海	竜谷大学論集 四〇—六
秀逸と花	下坂守	史林 五八一—	法然門下の菩提心観—二 —菩提心廃捨への批判と その展開	丸山博正	大正大学研究紀 要文学部仏教学 部 六〇
山門使節制度の成立と展開 —室町幕府の山門政策を めぐって	永原慶二	前衛 三八九	選択集について —法然語録解釈の基準と して	高橋正隆	大谷学報 五五—二
衆中談合と下剋上 —民衆の変革思想の芽生 え(日本の思想—八—)	大山公淳	密教文化一一二	秀庵文庫本「選択本願念仏 集」と「高山寺聖教目録」 について	北條幹二	仏教史研究 八
鎌倉時代の神仏道—下—	中ノ堂一信	日本史研究 一五—二	西山証空上人の一考察	玉山成元	大正大学研究紀 要文学部仏教学 部 六一
東大寺大勸進職の成立 —「俊乗房重源」像の再 検討	上田靈城	密教文化一一二	浄土宗における道光の位置 (大正大学創立五〇年記念 論文集)		
鎌倉仏教における戒律の宗 派化	納富常天	金沢文庫研究 二一—三			
東国仏教における外典の研 究と受容					

親鸞聖人における末法思想

浅野教信

竜谷大学論集 四〇五

親鸞における初期の己証

石田瑞磨

南都仏教 三五

親鸞における神祇

上原英正

倫理学年報二三

親鸞の聖徳太子観

神子上恵龍

奈良大学紀要四

親鸞における曇鸞教学の受容と展開

幡谷明

大谷大学研究年報 二七

親鸞教学の形成過程を中心とする一考察

井上正見

竜谷大学仏教文化研究所紀要 一四

親鸞における至誠心积理解の一考察
—法然の思想的影響について

「自然法爾」消息の意味するもの

中西智海

相愛女子大学・相愛女子短期大学研究論集 国文学部 二二三

親鸞における信の境位と歴史とのかかわり

「教行信証」の論理
—特にその思想的意義について

高橋功

奥州大学紀要 八一—

親鸞と『歎異抄』

下房俊一

鳥根大学文学部紀要 文学部編 八

存覚上人の行論とその背景

普賢晃寿

竜谷大学論集 四〇六

御文の研究

法雲俊存

親鸞教学 二六

信濃における時衆の展開

金井清光

長野 六四

沙石集と歎異抄との間

稲田繁夫

長崎大学教育学部人文科学研究報告 二四

沙石集の研究—六

山下正治

立正大学文学部論叢 五二

忍性の浄土教思想に関する一資料
—「書西方浄土記」の問題をめぐって

日置孝彦

金沢文庫研究 二一—二

日蓮の道徳哲学研究

戸頃重基

金沢大学法文学部論集 哲学編 二二

—とくに業の必然性と意志自由論について

台密葉上流祖栄西の禅密観
—真禅融心義を中心として

獅子王円信

日本仏教学会年報 四〇

道元と如浄—二—

伊東洋一

文経論集 一〇—五

道元の修証観の一省察

定兼範明

岡山大学教養部紀要 一一

永平清規の構造

田中真海

宗学研究(駒沢大学曹洞宗宗学研究所) 一七

—行持指導理念としての仮式

真字「正法眼蔵」の研究

河村孝道

駒沢大学仏教学部研究紀要 三三

—「正法眼蔵成立史の研究究」の一環として—三—

「正法眼蔵弁註」成立考

小坂機融

〃

—異本とその成立の周辺

鎌倉期初頭に観る禅密の交流と瑩山禅師

竹田鉄仙

禅研究紀要 四・五

曹洞宗における密教の受容

坂内龍雄

密教学研究 七

曹洞宗団の成立について

大久保道舟

禅研究紀要 四・五

中世曹洞禅の一考察

原田弘道

駒沢大学仏教学部研究紀要 三三

中世前期の美濃に於ける禪宗の発展	玉村竹二	金沢文庫研究紀要 一二二	横井清「中世民衆の生活文化」	仲村研	歴史学研究 四二六
五山制度史攷	久須本文雄	禪文化研究所紀要 七	大橋俊雄著「時宗の成立と展開」	石田善人	史学雑誌 八四―一一
守護大名山名氏と禪宗 ―とくに栖真院開創について	岡部恒	人文論究(開西学院大学人文学会) 二五―二			
看聞御記に見えたる地藏詣・念仏躍と風流	木内一夫	国学院雑誌 七六―五			
中世に於ける長谷信仰	達日出典	研究紀要(京都精華学園) 一三	近世における文明思想の形成	銅直勇	研究紀要(明星大) 一〇
両部神道成立の一考察	久保田収	芸林 二六―一	日本思想史における市民権意識の系譜(2) ―教育権を中心として	堀江宗生	東海大学紀要教養部 六
中世の天神信仰と地方文化 ―安房平群天神縁起絵巻と武蔵小手指村北野天神図繪	小笠原長和	千葉大学人文研究 四			
中世八幡信仰の一考察 ―八幡愚童訓の成立と性格	新城敏男	日本歴史三二二	徳川前半期における実学と經驗的合理主義	源了圓	史帥(日本女子大) 一六
吉田神道における隱幽教の秘伝 ―特に十八神道行事の成立について―	出村勝明	神道史研究 二二―二	日本における実学運動の展開―六― ―仏教から儒教への転向と林羅山の实学觀	〃	心 二八―七
三科祓の成立について	〃	皇学館論叢 八一―三	中江藤樹の实学觀	〃	〃 二八―九
延徳密奏事件の一考察 ―「光物」との関連において―	高橋美由紀	日本思想史研究 七	熊沢蕃山の实学思想	〃	〃 二八―一一
横井清著「中世民衆の生活文化」	岩崎武夫	文学 四三―二	熊沢蕃山における経世済民の实学	〃	〃 二八―一二
			保科政権と林家の学問	和島芳男	大手前女子大学論集 九

近世

安東省菴

—人間、学問、詩心—
未完

山室三良

福岡大学人文論叢 六一—四

貝原益軒の儒学と実学

岡田武彦

文理論集(西南学院大) 一五一—

新井白石私考

荒川久寿男

皇学館大学紀要 一三

新井白石と元禄時代

宮崎道生

日本歴史三三一—三

鷺峰史学と白石

安川実

神道学 八五

新井白石とヨーロッパ

〃

国史研究(弘前大) 六二・六三

「昔昔春秋」と中井履軒

新田大作

実践女子大学文学部紀要 一七

池田草庵の「大学」解釈について

木南卓一

帝塚山大学論集 一〇

近世儒学と熊坂台州の思想

庄司吉之助

福島史学研究 一九

熊坂台州の政治と儒者批判

〃

〃 二〇

林鶴梁とその著述(二・完)

篠木弘明

群馬文化 一五八

山鹿素行子と楠公

森田康之助

神道学 八五

伊藤仁斎における学問と教育

源了圓

言語と文芸八一

日本人の思考と信仰—九—

伊藤仁斎と古義学

日本及日本人 一五三—二

—ヒューマニズムから宋儒を批判

平田小六

〃 一五三〇

仁斎と徂徠—七—

〃

〃 一五三〇

荻生徂徠の文学と思想

〃

〃 一五三〇

—上—既成儒学観を覆えした旋風

〃 一八一

—下—封建支配の瓦解を啓示

〃

〃 一五三一

太宰春台論

高橋博巳

文化 三八—三・四

儒教の世界像の崩壊と太宰春台

小島康敬

学習院大学文学部研究年報 二一

皆川淇園の「内外」の説

佐田智明

北九州大学文学部紀要 一三

—あゆひ抄との関連より

藤井貞文

国学院雑誌 七六一—一

国学に於ける批判の精神

野崎守英

理想 五〇九

「物」と「もの」

小林秀雄

新潮 七二—二、四、六、八、一〇、一一

—荻生徂徠と本居宣長の所説を通して

高橋正夫

心 二八一—八、一〇

本居宣長

渡辺武

跡見学園女子大学紀要 八

—五五、五六、五七、五八、五九、六〇—

本居宣長に於ける女童心

渡辺武

〃

—排芦小船と山鹿語類をめぐって—

渡辺武

〃

本居宣長の「まごころ」について

渡辺武

〃

「道」と「雅び」

渡辺武

〃

—宣長学と「歌学」派国学の政治思想史的研究

渡辺武

〃

—三、四完—

渡辺武

〃

宣長学の性格についての一考察

渡辺武

〃

—その日本至上主義思想を中心として—

岡田千昭

九州史学 五七

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

本居宣長の漢意排斥

城福勇

香川大学教育学部
研究報告第一
三八

鬼神論の周辺

子安宣邦

待兼山論叢
(日本学篇) 九

士清をめぐる人々
―上、中、下―

北岡四良

皇学館論叢
八一―一、二、三

「三大考鈴木朗説」について

尾崎知光

郷土文化(名古屋郷土文化会)
三〇―二

富士谷御杖の思想について
の一考察

鈴木暎一

日本思想史学七

日本人の思考と信仰―五―
国学思想の先駆者たち
―下―理智と狂信―国学
者としての平田篤胤

平田小六

日本及日本人
一五二八

〃

〃

〃 一五二九

〃
古学の運命と歌の心
―和歌の革新とその時代

山下明

桐朋学報 二五

生田万に見る幕末国学の
位相(上)

八箇亮仁

京都大学教育学部
紀要 二一

石田梅岩の天人一致とその
意義

遠藤明子

日本女子大学紀
要文学部 二四

石田梅岩における人間観

柴田実

日本歴史三三三

石門心学と「徒然草」
―近世町人哲学の源流

平田小六

日本及日本人
一五三三

日本人の思考と信仰―一〇―
石田梅岩の学統を継ぐ人々
―日本的発想の典型―石
門心学

寛政異学の禁と心学

柴田実

関西大学文学論
集 二五―一・
二・三・四

梅園哲学の思想史的意義

柳沢南

倫理学年報二四

安藤昌益と大館・八戸の風
土

三宅正彦

民族芸術研究所
紀要 二

安藤昌益の晩年資料と二井
田村

石垣忠吉

〃

前野良沢
(日本の思想―五―)

加藤文三

前衛 三七九

寰宇総論の研究

吉田忠

日本文化研究所
研究報告(東北
大) 一一

二宮尊徳と儒教

加藤仁平

斯文 七八

遠州報徳主義の成立

海野福寿

駿台史学 三七

易学伝授の講習

近藤啓吾

神道史研究
二三―四

吉田松陰の歴史意識
―水戸学との関連におい
て―

露口卓也

日本思想史学七

「仁」と「三代之道」
―横井小楠思想の特質に
ついての一考察

沼田哲

日本歴史三三三

葉隠について

黒沢幸昭

実存主義 七二

近世における儒教的
女訓書の展開と性格

船津勝雄

紀要(愛泉女子
短大) 一〇

古学思想の形成と教育論
―素行と徂徠を中心
に

古川治

甲子園大学紀要
四

細井平洲の教育思想と
その展開

関山邦宏

日本の教育史学
一八

咸宜園入門者についての研究

井上義巳

青山学院大学文学部紀要 一六

咸宜園について

長富優

史学論集(駒沢大) 四・五

豊後学の門流とその近代教育への影響―三―

鹿毛基生

大分大学教育学部研究紀要教育科学 四―五

「気吹屋門人帳」小考―門人の年次別国別分布を中心―

三木正太郎

皇学館大学紀要 一三

大原幽学の換子教育と村改革

大槻宏樹

早稲田大学教育学部学術研究教育・社会教育・心理・体育編 二四

幕末洋学史における適塾の地位―「福沢屋諭吉」前史研究として

長尾政憲

法政史学 二七

鈴木正三の思想

黒沢幸昭

山梨大学教育学部研究報告(第一分冊) 二六

鈴木正三の思想―幕藩成立期の支配思想についての一つの試み

倉地克直

日本史研究 一五五

等膳和尚と家康

鈴木泰山

禅研究紀要 四・五

近世初期の新義真言宗教団―特に智積院三世日誉を中心として

宇高良哲

大正大学研究紀要文学部・仏教学部 六〇

盤珪禅師と最禪寺―鬼貫と不生禪

門脇良光

いたみ 三

江戸中期における諫暁活動―了梗日雄の行動に見る―

宮崎英修

棲神(身延山短大) 四八

江戸時代後期の神祇信仰と浄土真宗の立場

浅井了宗

竜谷大学論集 四〇六

近世北陸における真宗学僧の教化活動―その社会思想史的意義

橋本芳契

日本海文化 二

失明の跡部良顕―特に「安座伝」の成立との関係

谷省吾

皇学館論叢 八―二

跡部良顕覚書

〃

神道史研究 二三―一

吉見幸和の神学

安川実

神道学 八四

伊勢信仰と御師

矢島憲之

長野 六三

富士御師について

坂本信生

商経論集(千葉経済短大) 七

修験山伏の世界と三浦命助―脱藩放浪時代の「日記」を中心―

森毅

法制史研究二四

イエズス会年報の成立と評価

Hubert Cieplik

東方学 四九

切支丹の理念とその時代

上原袈裟美

四国学院大学論集 三三

不干斎フアビアン「妙貞問答」上巻「禅宗之事」について(補遺)

井手勝美

史学研究一二六

キリシタン俗書の神秘(仏教における神秘思想)

田北耕也

日本仏教学会年報 四〇

「潜伏キリシタン」の足跡―解放への道程

葛井義憲

思想の科学第六次 五五

「本朝二十不孝」論
—先行不孝説話との關係
を中心—
箕輪 吉次
学苑 四三三

近松浄瑠璃の思想—二—
同一性
藤原 暹
ノートルダム清
心女子大学国文
学科紀要 八

偽証と古代学
—近世尚古主義者の遊び
本居宣長の伊勢物語評
—宣長の古典批評の態
度に関連して
日野 竜夫
文学四三一〇

本居宣長の文章観
—宣長・高尚を中心に
鈴木 淳
日本文学論究
三四

本居宣長の画論
—宣長・高尚を中心に
庵 谿 巖
山梨大学教育学
部研究報告二五

近世後期俗芸術における創
作意識の推移
—雅と俗と
狩野 博幸
哲学年報 三四

信長における「外聞」と
「天下」について
佐々木 潤之介
新潟史学 八

大塩の乱と民衆
宮城 公子
四天王寺女子大
学紀要 八

大塩の乱と農民的基盤
乾 宏巳
ヒストリア六九

水戸藩における郷校と尊攘
運動
瀬谷 義彦
茨城県史研究
三三三

幕末における国家的理念の
創出
—後期水戸学派の国体論
について
露 口 卓也
文化史学 三一

海運防衛と海防論(上)、
(下)
太田 弘毅
芸林 二六一三、四

江川英龍
—建議書にみる海防論の
展開
仲田 正之
史学論集(駒沢
大) 四・五

倒幕思想の形成
—吉田松陰、竹市瑞山、
大久保利通(日本の思
想—六一—)
池田 敬正
前衛 三八六

高杉晋作の富国強兵思想
「藩論」と坂本龍馬(付
「Tan Ron」"ジャパン・ク
ロニクル"明治四三年七月
一五日—一六日掲載)
藤井 定義
歴史研究(大阪
府立大) 一七

幕末経世論
—横井小楠・宗教論—
山崎 益吉
高崎経済大学論
集一八一—二・三

幕末・維新时期における「公
議輿論」—概念の諸相—
—近代日本における公権
力形成の前史としての
試論
井上 勲
思想 六〇九

近世における農民層の「家」
意識の一般的成立と相統
—羽州村山地方の宗門人
別帳の分析を通じて
大藤 修
日本文化研究所
研究報告(東北
大)別巻 一二

民衆蜂起の論理
—惣百姓一揆と世直し—
—「皮多」の抵抗意識ノート
—
桐村 彰郎
法学雑誌(大阪
市立大) 二一—三

幕藩体制解体期における一
女性の社会批判
—只野真葛の「独考」を
中心に
前 圭一
兵庫史学 六五

幕藩体制解体期における一
女性の社会批判
—只野真葛の「独考」を
中心に
宮沢 民子
歴史学研究 四二三

西山松之助編『江戸町人の研究一』

松本四郎

史学雑誌 八四—四

荻生徂徠の思想をめぐって

—吉川幸次郎「徂徠学案」合評（座談会）

上藤春平
尾藤正英

思想 六〇八

日野竜夫著「徂徠学派」

梅谷文夫

国語と国文学 五二—一

沼田次郎・松沢弘陽校注「日本思想大系六六 西洋見聞集」

亀井俊介

日本文学研究（日本英文学会） 五二—一・二

名越時正著「水戸学の研究」

荒川久寿男

神道史研究 二二—三

布川清司著『近世日本の民衆倫理思想』

小川常人

芸林 二六—三

原敬吾著「黒住宗忠」における問題提起

中村光夫

地域史研究（尼崎市史研究紀要） 四—三

安丸良夫著「日本の近代化と民衆思想」

中村元

心 二八—一

宮田登

内山秀夫

法学研究（慶応大学法学研究会） 四八—九

布川清司

日本史研究 一四九

史林 五八—三

西田哲学批判のゆくえ—純粹経験と信仰体験のはざま

西村恵信

禅文化研究所紀要 七

近代

大正文化への一視点

鹿野政直

信濃 二七—九

二つの大正デモクラシー論—その今日的意味—

尾城太郎丸

三田学会雑誌 六七—一二

日本におけるデモクラシーとアジア主義

中野泰雄

亜細亜大学経済学紀要 一二

古いシンボルの連続と伝統の革新—「アジアの近代化」考

武田清子

国際基督教大学学報 一

加藤弘之の社会学理論

斎藤正二

政経研究（日本大学法学会） 一二

『文明論之概略』研究（上）

佐志伝

史学（慶大） 四七—一・二

明治期日本人の自然観の比較的考察—志賀重昂の場合—

宇喜田敬介

同志社女子大学学術研究年報 二六—一

明治中期の思想的課題—井上哲次郎と大西祝

渡辺和靖

日本文化研究所研究報告（東北大学文学部日本文化研究所） 一一

吉野作造の言論の型—「中央公論」に於る辛亥革命論の「弁証法」

高木喜孝

社会運動史 五

「善の研究」まで

久野昭

実存主義 七二

拙論の反論に答ふ—我汝哲学と西田哲学との関係について

野口恒樹

皇学館論叢 八—二

田辺元における国家

石関敬三

唯物史観 一五

戸坂潤のイデオロギー論

田中暢志

研究紀要（鹿児島短大） 一五

柳田国男における国学の伝統	大久保 正	国語と国文学 五二―七七	大正自由教育の分析視角 ―その実践的限界	小島 勝	京都大学教育学部紀要 二二
近代日本におけるホッブス哲学受容の歴史	高橋 真司	長崎造船大学研究報告一六―二	大正教育と新カント派―二― 篠原教育学と手塚岸衛の 実践をめぐって―一、二―	松井 春満	大阪経大論集 一〇〇三・一〇四、 一〇〇五
忌部神社所在地考 ―明治史学出発の課題 ―承前―	藤井 貞文	神道学 八四	日本旧植民地における教育 ―「満州」および間島に おける朝鮮人教育	槻木 瑞生	名古屋大学教育学部紀要教育学科 二一
明治十年代前半期の德育施策と福沢諭吉の德育論	影山 昇	愛媛大学教育学部紀要第一部 二一	五箇国条約の締結と信教の自由 神道祭神勅裁の過程	藤井 貞文	国学院雑誌 七六―二
廃藩前後における福沢をとりまく地方の教育動向について ―紀州藩共立学舎をめぐって―	多田 建次	慶大大学院社会学研究科紀要、社会学・心理学・教育学 一五	清沢満之の主題と方法 ―二―	出雲路 暢良	国学院大学紀要 一三 金沢大学教育学部紀要人文・社会学・教育学科 二四
西洋教育思想の移入と実践小史 ―明治日本における	田中 克佳	〃	井上円了の靈魂不滅論について	河村 孝照	東洋学研究 九
森有礼の思想体系における国家主義教育の成立過程 ―忠誠心の射程	園田 英弘	人文学報 三九	近代天皇制国家と仏教 ―「大逆事件」に連座した僧侶をめぐって―	赤松 徹真	仏教史研究 八
井上毅の教育思想 ―思想的基盤の形成	野口 伐名	弘前大学教育学部紀要A 三四	日本における近代仏教学	前田 恵学	禅研究紀要 四・五
「国民之友」の教育論 ―教育観において蘇峰は変節したか	中村 青史	近代熊本 一七	植村正久の思想基礎論 ―その多岐性と統一性について	大内 三郎	日本文化研究所 研究報告(東北 大学文学部日本 文化研究所) 一一
津軽英学―三― 弘前漢英学校と東奥義塾の開学	山本 博	文化紀要 九	植村正久における神学思想	田代 和久	日本思想史研究 七
三宅米吉の歴史教育論 ―その歴史観との関連に於て	河内 徳子	教育学研究 四二―三			

明治国家主義下のプロテスタント

植村正久その「預言的」指導性――

海老名弾正のキリスト教信仰とその思想
――その樂天的積極主義神学

内村鑑三の無教会主義と「自然」

内村鑑三おぼえ書き――九――

内村鑑三――上、下――

内村鑑三の世界観とShakespeareの人間観
――中、中の二――

海老名弾正の戦争論

海老名における聖書理解

海老名をとらえる視点
――海老名の神学思想についての一考察

海老名弾正における国家の問題

石川三四郎
――海老名弾正との関連において

山崎為徳の思想
――『天地大原因論』の世界

大島英介

溝口 潔

今中寛司

鈴木範久

岩谷元輝

桶谷秀昭

前田利雄

武 邦保

橋本滋男

竹中正夫

平井亮一

辻野 功

大島英介

法学志林
七二―三・四

キリスト教社会問題研究 二三

立教大学研究報告
人文科学三四

城西経済学会誌
一〇―三

すばる
二〇、二一

札幌大学外国語学部紀要、文化と言語八一、九一

キリスト教社会問題研究 二三

〃

〃

神戸海星女子学院大学・短期大学研究紀要一四

キリスト教社会問題研究 二三

岩手史学研究
六〇

押川方義と東北地方のキリスト教伝道
――その着手にいたる経過

留岡幸助 人と思想――

「青山評論」記者三浦泰一郎論
――北村透谷との接点を辿って

明治期のプロテスタント伝道
――特に岸和田における山岡尹方の貢献について

明治初期ギリシア正教伝道史における土族信徒の政治活動について
――三戸聖母守護会記録の一断面――

日本村落における基督教の定着と変容
――千葉県下総福田聖公会の事例

「池田孝太郎日記」とキリスト教
――明治中期の青年群像――

日本の伝統的抒情性とキリスト教
――永井多恵子をめぐって「含年譜」

熊本における教育と宗教との衝突

大内三郎

井上勝也

辻本雄一

萩原俊彦

佐藤和夫

西山 茂

新藤 東洋男

永藤 武

上河一之

日本文化研究所
研究報告(東北
大学文学部日本
文化研究所)
別巻 一二

キリスト教社会
問題研究 二三

国文学研究(早
稲田大学国文学
会) 五

史朋 一〇

国史研究(弘前
大) 六二・六三

社会学評論
二六一

近代熊本 一七

国学院大学日本
文化研究所紀要
三四

近代熊本 一七

一九三〇年代における日本
基督教会の活動―二―

キリスト者と「自我」の問
題―高倉徳太郎の場合

維新の文人学者河野守弘
(日本史発掘―二六―)

吉田松陰の思想系譜をめぐ
って―国木田独歩・大庭柯公
の場合

矢野玄道の中世説話集注釈
―附、木野戸勝隆の補遺

鷗外と哲学との出会いにつ
いての覚え書

漱石の日本観と結婚論

漱石とキリスト教

正宗白鳥に於ける「虚無的
」感性について
―「日本のニヒリズム」
の一考察

T・S・エリオットと西田
幾多郎

岡倉天心の思想と現代

中井正一試論

―その言語・映画の理論
と弁証法の問題について

土肥 昭夫

キリスト教社会
問題研究 二三

浜井 修

実存主義 七二

衣笠 安喜

日本及日本人
一五二八

大塚 英明

史叢 一八

小泉 道

愛媛大学法文学
部論集文学科編 八

亀山 健吉

理想 五〇七

相原 信作

甲南大学紀要文
学編 一六

大岡 昇平

展望 一九八

竹内 整一

倫理学年報二四

輪島 士郎

英語青年 一一二

謝世 輝

現代の眼
一六一―一二

杉山 光信

東京大学新聞研
究所紀要 二二三

大久保利通における近代意
識の形成

高橋 康昌

郡馬大学教養部
紀要 九

宮崎民蔵の思想と行動
―ある土地改革者の軌跡

牧原 憲夫

歴史学研究 四二六

福沢諭吉における国権論と
民権論

林 喜代美

教養部紀要(徳
島大) 一〇

熊本国権党の成立

上村 希美雄

近代熊本 一七

古沢滋と初期自由民権運動
(上)(下)

山下 重一

国学院法学
一三一―三、四

英学・キリスト教と自由民
権―東北の場合

池田 哲郎

福大史学 一九

自由民権運動とイギリス政
治思想

山下 重一

国学院大学栃木
短大紀要 九

自由民権運動と蘇峰

和田 守

山形大学紀要社
会科学 五―二

秩父事件
―森蔵里帰りと植木枝盛

松本 成美

文化評論 一七五

伊古田純道の生涯と思想

中沢 市朗

歴史評論 三〇五

島田三郎の思想と行動(二)
―第一議會を中心として

内田 修道

神奈川県史研究
三〇

小野梓の法思想

古井 蒼生夫

早稲田法学会誌
二五

明治期に於ける外国法の撰
取と日本人の法意識
―井上毅と福沢諭吉につ
いて

木野 主計

大倉山論集 一二

植木枝盛論稿補遺

鈴木 安藏

立正大学教養部
紀要 七

植木枝盛の主権論その他

〃

〃

植木枝盛立案の「無上政法論」について
―無上政法論―
―枝盛立案説の考察―

吉田 曠二 史朋 一〇

評伝・大杉栄
一、二、三、四、五、六、七

秋山 清

思想の科学第六次四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六

三酔人経綸問答 試論

菊地 宏

法学(東北大学法学会) 三八―三・四

河上肇の明治末期
―閉塞―からの覚醒

鹿野 政直

現代の眼 一六―九

兆民研究における「政理叢談」の意義について

井田 進也

文学 四三―九

平和の戦士大山郁夫の政治思想
―没後二〇周年に際しての―の再評価と事後的評価
―上、下―

西田 照見

現代の理論 一二―一〇、一一

中江兆民の自由観
―富者の自由から貧者の自由へ―

松永 昌三

季刊科学と思想 一五

明治大正デモクラシーの系譜
―蔵原惟郭とその周辺―
二、三、四、

桜井 純一

現代と思想 一九、二一、二二

山路愛山研究序説
―「惑溺」と「凝固」―

岡 利郎

同志社法学 二七―一
北大法学論集 二五―四

大正政治思想史論のためのノート
―長谷川如是閑における「文明批評家」の成立―

飯田 泰三

法学志林 七二―二

明治期社会主義者の議会政治観

西川 洋

三重大学教育学部研究紀要 二六―一、二五

北一輝における「光」と「影」

木田 道太郎

京都産業大学論集 五一―一

幸徳秋水
―根底からものを問う思想家の歩み―

森 涼子

紀要(愛泉女子短大) 一〇

北一輝論 三一

古屋 哲夫

人文学報(京都大学人文科学研究所) 三九

幸徳秋水の天皇観

辻野 功

同志社法学 二六―三

北一輝における国家・天皇・自我

宮本 盛太郎

愛知教育大学研究報告第一部人文科学・社会科学 二四

大正知識人の命運
―大杉栄の場合―

鈴木 秀治

比較文学研究 二八

美濃部達吉の国家理論

木村 正俊

高千穂論叢 四九―二

大杉栄年譜

森山 重雄

人文学報(東京都立大学) 一〇四

「不常典」をめぐる試論
―大正と天皇―

小野 柳太郎

日本史研究 一五〇、一五一

明治期の天皇観—— 国体論の連想 —その含羞と畏怖	坂田吉雄	産大法学九—二 展望 二〇—	信州の企業者精神 —岩下清周における企業 者精神の生成—	上原栄吉	信濃二七—二一
天皇制と日本帝国主義	遠山茂樹	歴史評論三〇—五	工場法成立と社会政策思想	池田信	社会学論集 (埼玉大)三五
村上吉作(野村耕作)の天 皇制国家論・戦略論	中村福治	東北大学農学研 究所報告 二七—一	大正期の仏教社会事業の一 考察	西田誠行	竜谷大学仏教文 化研究所紀要 一四
福沢諭吉の「脱亜論」 —近代日本における「脱 亜」の形成についての 試論	今永清二	アジア経済 一六—八	近代日本社会思想の根基 経済思想から見た福沢諭吉 と康有為	羽倉一雄	大分大学経済論 集 二七—五
明治期のナショナリズム研 究—— 陸羯南の「国民旨義」	小寺正一	京都教育大学紀 要A人文・社会 四六	福沢諭吉の金本位制論	藤原昭夫	千葉商大論叢B 商経篇一二—四
日清戦争後における陸羯南 の外交論(一)	山口一之	駒沢史学 二二	農本主義の思想基調	斎藤之男	農業総合研究 二九—四
田岡嶺雲の連亜論 —「教奇伝」にみる東洋 恢復論	西田勝	現代の眼 一六—一	高木俊輔著『明治維新草莽 運動史』	鎌田永吉	歴史学研究 四二—
宇垣一成の対外観 —一九二〇—一九三〇年 を中心として	池井優	教養論叢(慶応 義塾大学法学部 法学研究会) 四三	高木俊輔著『明治維新草莽 運動史論』	井上勝生	史学雑誌 八四—三
もう一人の尾崎秀美「民族 主義者」転向の論拠につい て	石堂清倫	現代の眼 一六—四	植手通有「日本近代思想の 形成」	遠山茂樹	歴史学研究 四二—〇
柳田国男のアジア意識 (研究ノート)	藤井隆至	アジア経済 一六—三	荒川久寿男著「近代日本思 想史研究」を読んで	永江新三	芸林 二六—二
日本人のアジア観 —大東亜共栄圏の思想と 政策—	河原宏	社会科学討究 二〇—二三	堀岡弥寿子著「岡倉天心 —アジア文化宣揚の先駆 者」	坂本夏男	皇学館論叢 八一—四
				井田好治	比較文学 一八

北沢文武著『石川三四郎の生涯と思想』	安田浩	埼玉民衆史研究 一
三谷太一郎「大正デモクラシー論」	太田雅夫	歴史学研究 四二四
太田雅夫「大正デモクラシー研究」	笛木隆	歴史学研究 四二四
「知識人の思想と運動」		
宮本盛太郎著「北一輝研究」	竹山護夫	史学雑誌 八四—一〇
家永三郎著「田辺元の思想的 research」	竹内良知	史学雑誌 八四—九
家永三郎著「田辺元の思想的 research」について	柳田謙十郎	歴史評論三〇六
天皇制論の問題点	赤河賢三郎	歴史学研究 四二五
「久野収・神島二郎編「天皇制論集」によせて		

発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が両教授の芳燭をけがすことになった。

本専攻の学部（第三・四年）は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院（修士・博士課程）は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史（国史）専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を刊行し、その研究・教育の状況を学の内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石田一良

日本思想史研究

第十号

昭和五十三年三月十五日 印刷
昭和五十三年三月二十五日 発行

編集代表者 玉 懸 博 之

仙台市原町四丁目九ノ十四

印刷所 合名
会社 共同印刷所

仙台市川内

発行所 東北大学文学部

日本思想史学研究室

